

| | |
|--------------|---|
| Title | クレアの環境詩 'To the Snipe' と 'The Fens' |
| Author(s) | 鈴木, 蓮一 |
| Citation | Osaka Literary Review. 49 P.23-P.35 |
| Issue Date | 2011-01-24 |
| Text Version | publisher |
| URL | https://doi.org/10.18910/25152 |
| DOI | 10.18910/25152 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

クレアの環境詩 'To the Snipe' と 'The Fens'

鈴木 蓮一

本稿は、「より大きな修辞上の広がりにより持続した知性的な目的」¹ をもち、また「home と homeliness についてのクレアの最も優れた、そして最も探求的な詩の一つである」² と賞賛される 'To the Snipe' 及びその詩と深い関連がある、「沼沢地と環境についての最も詳細な表現を提示している」³ と評される 'The Fens'⁴ の理解を試みる。

1832年6月、長年住み慣れたヘルプストンから、パトロンの一人フィッツウィリアム伯が提供するノースバラの農夫小屋に転居後間もなく書かれた 'To the Snipe' は、沼沢地とそこに棲むシギの観察に基づいている。沼沢地とシギの描写は、現代の生態学や生態系の観点からすれば、まさに生き物の行動とその生息地としての自然環境についての叙述となっている。ノースバラは東南を Great Northborough Fen という沼沢地帯に隣接している。この転居を機に、クレアは経済的独立と同様、詩作にたいするパトロンや編集者の干渉から独立することを目指していた。

この詩を読む前に、沼沢地の地勢的特徴とノースバラへの転居前後の精神状態についてのクレアの記述を見ておきたい。'Autumn' と題された散文では、「これらの低湿地や草の生えている川辺の低地における田舎の美しい風景と事物は、水溜りの多い道沿いにわずかな牛や羊を追う農夫のような者の孤独を和らげる」⁵ とヘルプストンの魅力を述べているが、1832年1月のテイラー宛の書簡では、ノースバラの親しみのない、荒涼とした沼沢地という自然環境の魅力のなさについて、「そこには森やヒース、ハリエニシダの茂みやモグラ塚、また檜の木もない」⁶ と述べている。さらに、「私は、自分が

旧友と健康を除くすべてのものから独立していけると思う。そして成功裡に終わる最善の方法はうまく始めることですから、私の願望は一新して生活を始めることです——すなわち、ここを去る前に借金を返済し、小屋住農を始める時には借金がないことです」⁷と将来の抱負を語っているけれども、転居後の暮らし向きが良くならなかつたことは、1832年9月6日のテイラー宛の書簡を読めばわかる。「私は貧困にひどく束縛されているので、もはやそれに堪えることができません」、「貧困が私を陥れた境遇を恐ろしいほど感じています。しかし、独立を支える杖は、誰も予見できない大家族という出来事によって折れました」、また「私は今のところ敷地に何も飼っていない。牝牛、豚、その他の家畜は何も。実際、この場所に転居する以前よりも私の暮らし向きは悪い」⁸とノースバラでの生活に言及している。「大衆には私の作品を好きなように判断してもらいたい。しかし、まるで訴訟を申し立てるだけではなく、私を世間に知られた乞食にすることにおいても権威をもっている州会議員であるかのように私の事柄をもてあそび、私の貧困を自分自身の偏見と指図をひっかける釘にする権利を誰ももつことはできないと思う」とか、「私は平穏と静寂を願望します。人を侮辱する者は誰も私の友ではない——私の逆境へのおせっかいな干渉は私の順境を増すことにはならない」⁹という感慨には、生活苦が詩人としてのクレアに与えた影響が窺われる。1832年10月20日のH. F. ケアリー宛の書簡における「無教育や出自の卑しさに、または私の道を邪魔するためにおせっかいが選ぶ他のすべての引き立て役に訴えることなく、(私の)詩集そのものによって私が判断されることを願う。しかし私はきっと妨げられると思われまふ。ご心配なく。私はまた、きっと詩を書き続けます。というのは、私が詩を書かずにはおれないように、悲しい状況にあっても、満足した気持ちでいたいという望みが私をせきたてるからです」¹⁰という箇所は、詩作、貧困、批評家との関係についての内省を表わしている点で特筆に値する。上述のような、1832年のノースバラ転居前後のクレアの経済的及び精神的状態を念頭におき、'To the Snipe' を読

んでいく。

1 連で、詩人はシギに「湿地を愛する者よ」と呼びかける。「房のようになったスゲの草むら」(hassock tufts of sedge)における、教会で跪いて祈るときに用いる「ひざ布団」も意味する "hassock" という語は、スゲが群生しているこの湿地に、詩人の祈りの場所である教会のイメージを重ね合わせる。「恐怖だけが汝の巣の周りに戦陣を張っている」(fear encamps / Around thy home alone)における "fear" は、湿地という「一種の思いやりのある有機体」(a kind of sympathetic organism)¹¹が人間の心の中に生じさせるものであり、人間にこの湿地への侵入を思いとどまらせるものである。従って、このような恐怖心は結果的にシギの巣と生息地を保護している。だが、"fear" を恐ろしい存在である人間だと解釈すれば、"encamp" という語は、神にそむくサタンに喩えられる人間の軍勢が教会に見立てられた湿地を包囲して陣を張っているイメージ¹²を喚起する。2、3 連では、コバンソウが、侵入する人間の足音を聞いて、震えながらも、人間の重さを支えることを拒否している。コバンソウは、シギやその他の生き物がショウブやカワヤナギの下に隠れて「安心して安全に」生きようと、人間の侵入に抵抗している。¹³ 3 連の "invest" には、1 連の "encamp" に相応した「敵対する力をもって包囲する」という意味もあるが、この場合は、シギの生息地を単に「覆い、取り囲む」という意味である。4 連では、この鳥の身体的特徴が湿地の地勢環境に適合していることを詩人は強調する。生存のために、不恰好なほど長い嘴によって、氷のように冷たい湿地の泥の中から餌を採るシギと環境の適合¹⁴は神の摂理であるとされる。6、7 連では、夏の日射しが湿地のスポンジのように軟らかな表面を照らし出す時でさえ、湿地を覆うショウブの陰に隠れているシギの巣の神秘性が強調される。

8 連でも、「これらの沼沢の多い低湿地」はシギにとって安全な場所であることが強調される。森では奥深く踏み入る男の子たちも、この低湿地に入ることはできない。9、10 連では、これまで低湿地は人間や家畜の侵入を拒

んできたが、今ではそこに棲む水鳥たちは人間を恐れ、人間が近づけない場所に隠れているという。「人間が踏み入ったことのない場所」(spots that never knew his [man's] tread) という語句は、現在この湿地が排水されることによって耕作地に変えられつつあることを暗示する。水鳥たちは「人間の息さえ」恐れ、湿地の奥へとこっそり逃げる。11連の 'restless' の意味は "constantly stirring or acting" ではなく、"uneasy in mind or spirit" (OED) である。だが、湿地の奥の「ひどく荒涼とした場所」、すなわち「ショウブが多いすべての場所」に隠れ棲む水鳥は脅えてはいない。ショウブの群生を描写する3連の「とても大きい森のようなショウブの茂み」(the clump of hugh flag forrest) という表現には、例えば5連の "... thy bill / Suited by wisdom good / Of rude unseemly length doth delve & drill / The gelid mass for food" におけるシギの行動を見る詩人のリアリズムの眼とは違った、ショウブが高く伸びて繁茂している世界を見るシギの眼がある。¹⁵ 水鳥たちを護り、励まし、嵐に立ち向かわせ、沼地という環境の中で安全と安心を保証する神の愛と摂理のみが賛美されるのではなく、彼らにとって安全ではない場所を、すなわちハンターが通る比較的硬い地面を避けねばならないことを知っている彼らの本能の重要性もまた賛美される。この本能は、'Shadows of Taste' の冒頭における、生存のための選択能力である「生得の情動」(the instinctive mood) と呼ばれる「識別力」(taste) を指している。

3、4連で強調されたシギの安全性は、15、16、17連において、泉の傍らでイバラがこの鳥に隠れ場所を与えているにもかかわらず、不確かなものとなる。荒地に縞模様をつけている、「小さな、ぬかった排水溝」(the little sinky foss) をシギは好まない。この排水溝は低湿地を耕作地にするためのものであり、低湿地が部分的に耕作地になっていることを暗示する。シギが排水溝を避けるのは、そこで掠奪者であるハンターたちが「脅えた大気をパーンという銃声で震撼させ」、猟犬たちがシギの生息地を嗅ぎつけるからである。生命を賦与された大気が象徴する自然そのものが、「危険な存在」

(danger)である人間の侵入に脅えている。人間が侵入できない湿地帯においてのみ、シギは安全に生息できる。18連で詩人は、「これら水が多い、ショウブの生えた湿地が広がっている所までは」、シギの「静かで、穏やかな巣」と生息地は存在できると認識している。"a still & quiet home"は、貧窮、病氣、批評家、パトロンのおせっかいな干渉に起因する不安感を抱くクレアの願望を反映している。「汝がよく姿を見せるこれらの場所で、／私は遍在する変らぬ神の愛を、落穂を拾うように感じとった。／驕る者や愚かな者が神の愛を嘲る、気まぐれなこの世から離れて／私は瞑想し、天国を想う」(In these thy haunts / I've gleaned habitual love / From the vague world where pride & folly taunts / I muse & look above)における "gleaned" が読者に「ルツ記」を想起させるように、「詩篇や宗教書のエコーが、場所とそこからの追放についての彼（クレア）の理解を明確に表わすのに役立っている」¹⁶というゴージの指摘は説得力がある。"habitual" と "vague" がそれぞれ含意するものはかなり対照的である。普遍かつ永遠である神の愛に満ちた湿地とは対照的に、人間社会は変りやすく、欺瞞に満ち、不確実であるため、信頼できないと詩人は瞑想する。それゆえ、彼は憂苦を経験する現実世界からシギが棲む世界へと後退し、聖書に慰めを求めながら、神の恩寵に浴して生きることを願う。それゆえ、人間が侵入しない湿地こそは、家族と共に生きる家庭人としてだけでなく、詩人としても「私」が神の救いを求めた場所であった。「そして、ここ（湿地）で私の精神は情熱に溢れ、より高潔な気分と／昂揚させるヴィジョンを抱く」(& here my heart warms into higher moods / & dignifying dreams)のである。つまり、神が尊重し、保護するこの湿地こそ、彼の詩的想像力が回復する場所である。その想像力は、神の愛がこの湿地においてさえ、すべての生き物にたいし「思いやりのある、穏やかな境遇」(a calm & cordial lot)を与えていることを、すなわち人間によって収奪されていない湿地帯に与えられた完全なエコシステムの存在を洞察している。この洞察には、湿地の生き物と同様、神の愛に支えられて生きることへの詩

人自身の願望も読みとれる。

最終連の「汝の境遇は私に正しい感情を用いることを教える。／すなわち最も荒涼とした場所においてさえ静穏が住人になり、喜びになるという感情を」(Thine [thy lot] teaches me / Right feelings to employ / That in the dreariest places peace will be / A dweller & a joy) における「正しい感情を用いる」とは、物事について明晰に正しく考えることを意味する。「明晰に正しく考える」ということは、人間が侵入できないという理由で、荒涼たる湿地においてさえ静穏が存在し、生存のために必要な環境が与えられ、すべての生き物が持続し、「喜び」を感じているということを洞察することである。ただ、"in the dreariest places" という語句については二つの解釈が可能である。一つは、「最も荒涼とした場所においてさえ」という解釈であり、その場合、「静穏」と「喜び」を保証する神の愛の遍在性や不変性を希求し、それに依存する詩人の態度が感じられる。またこの語句には、社会的階級的にはシギと同じ「最もみすばらしい場所」、「最もわびしい場所」において、両親と妻子からなる大家族を扶養する家庭人としての貧苦と、1830年代の詩文学の衰退期に感じた挫折感や焦燥感に悩む、不安な詩人が抱いた、「静穏」と「喜び」を回復するという願望が暗示されている。それは、低湿地においてさえ神の恵みは行き渡っているのであるから、シギと同じ境遇にある詩人も神の愛に護られて生きたいという祈りでもある。

他は「最も荒涼とした場所においてのみ」という解釈であり、その場合、人間が功利主義に基づいて沼沢地を農地へと開発したことに起因する土地の原初の姿の消滅と、それに付随して起こった生態系の破壊についての詩人の歴史的認識が感じられる。つまり、人間の侵入は不可能であるから、原始からの生態系が維持され、「静穏」と「喜び」が保証されている沼沢地のみが計り知れない価値をもつ場所であるとの認識である。この認識は生態学上極めて重要な見方を暗示している。それは、耕作地への転換による沼沢地の消滅が沼沢地で維持される多様な生き物とその生息地の消滅をもたらすという

見方である。シギの本能（安全にたいする感覚）は「苔で縁どられた水溜りから／赤い湧き水が泡立ち、噴き出している荒れ地に／縞模様をつけている小さな、ぬかった排水溝」にけっして近づかない。「排水溝」が象徴する耕作地化のための排水工事は、沼沢地の生態系を破壊する現実を読者に強く印象づける。生き物にとって、人間は湿地にハンターとして侵入する恐怖であったが、1820年以降、人間は、それまで開発に失敗してきた湿地を蒸気機関によって排水する近代資本主義農業という形をとって侵入する恐怖へと増幅した。イングランドにおける最後の完全な生態系が維持された湿地帯の耕作地への変貌はまさに神の愛への冒涇である、と詩人は考えたに違いない。この詩に見られる、このような生態系についての危機感こそ、ペイトやマキューシックがクレアを環境倫理学を先取りした詩人であると評価した理由であろう。¹⁷ しかしながら、現実の鳥であるシギの生息地としての環境は、同時に神の永遠の世界を象徴する。この神の世界のヴィジョンは、「ひざ布団」(hassock, 1 連)、「良き知恵」(wisdom good, 5 連)、「神の力」(power divine, 13 連)、「遍在する愛」(habitual love, 19 連)、「無限の天」(unbounded heaven, 20 連)で暗示される。

'To the Snipe' をこのように読めば、この詩には湿地という環境に生息するシギをリアリズムの手法で叙述する詩人と、それら対象を瞑想し、自己の境遇を内省する詩人が重なり合っただけに見える。それゆえ、この詩は、湿地という自然環境とそこに生きる生き物を描写した単なる叙景詩ではない。この詩には、シギという鳥自体の特質、環境との調和と相互依存、湿地の生態系への人間の侵入にたいする今日的な危機意識などが表現されているだけでなく、19 連の「私は遍在する変らぬ神の愛を、落穂を拾うように感じとった」における 'gleaned' という語が暗示するように、詩人自らも侵入者であることを意識しながら、生の不安から脱却し、湿地の安全と安心へ、言い換えれば現実世界からシギの棲む神の世界へと後退し、生きる支えとしての神の愛を求める詩人の祈りもまた表現されている。

この詩の冒頭で「湿地を愛する者よ」(Lover of swamps) と呼びかけられるシギは、その環境と自己の境遇を瞑想する詩人自身ではないか。詩人はシギと自己を同一視することによって、自己の安全感、被保護感の回復への祈りを表しているのではないか。最終連で、シギの存在は、低湿地に隣接するノースバラもヘルプストンと同様、保護と安心の気分を、また静穏とそれがもたらす喜びを与えるであろうと詩人に教えている。この詩のシギと風景は現実のものであるが、同時に幻想的あるいは神秘的な性質を帯びた存在でもある。

'To the Snipe' をよりよく理解するために、この詩とほぼ同時期(1832～1835年)に書かれた 'The Fens' という詩を読むことが有益である。1連で詩人は、スゲや葦の中を歩いているとき、蛇に遭遇する。「とぐろを巻いた蛇が川の中にポチャンと落ち、／二又になった舌でシューという音をたてながら、身をくねらせて川を横切っていくとき、／身に危険を感じるといつもするように、／ぞっとして、すばやく有害なものから顔をそむけ、／恐怖から生じた一瞬の悪寒が私の血まで戦慄させる」(As danger ever does from ill / Fears moment ague quakes the blood / While plop the snake coils in the flood / & hissing with a forked tongue / Across the river winds along) における蛇と語り手の間には何の敵対関係もない。蛇には恐怖心がなく、語り手である人間を攻撃しようという意図もない。蛇はさっさと向うへ行ってしまう。語り手もまた、蛇に対して恐怖を感じてはいるものの、それに危害を加えようとはしない。語り手である人間とこの野生の生き物はそれぞれ独立して生きる共存関係にあり、¹⁸ 両者の間には侵入という行為がない。この引用箇所は、この共存関係こそが理想的であるという詩人の主張の象徴的表現である。2連におけるカワセミの捕食行動を観察する詩人の態度は注目すべきである。なぜならば、「太陽のきらめく光をうけて、／揺れ動いている灰色の柳の枝のうえで／オレンジ色、緑、青の上着をまとったカワセミが／すばやく動いて、砂利の浅瀬にいる小魚をさがしながら、／さざ波が立っている水の流れ

をじっと見つめているのを／いま、わたしは見ている」(In coat of orange green & blue / Now on a willow branch I view / Grey waving to the sunny gleam / King fishers watch the ripple stream / For little fish that nimble bye / & in the gravel shadows lie) という詩行が、冒頭の「川べりをぶらぶらとさまよいながら／わたしはスゲのあいだをカサカサと音をたて、／ほとんど茂みの高さほどもある森のようなイグサの中を押し分け、／歩いていくのが好きである」という詩行で表わされた、沼沢地への詩人の愛の理由を説明するからである。生きるための捕食は自然界における食物連鎖を暗示し、沼沢地の生態系を維持する重要な営みである。この営みは人間の想像力とは無関係にダイナミックに存在する厳粛な事実である。生態系の完全な状態とそのまったく損なわれていない価値を沼沢地の中に見出す詩人は、捕食しようとするカワセミの様態を活写する衝動を抑えられない。

6連では、ノースバラに転居する以前ヘルプストンで慣れ親しんだアカ鳶、木立、ハリエニシダの咲く荒野が沼沢地では見るができないので、詩人は寂しく思う。「しかし、ここ（沼沢地）においてさえ、わたしの想像力に満ちた気分は／飽きるまで、この何もない低湿地をうっとりして見る」(But here my fancys moods admire / The naked levels till they tire) という二行は意義深い。というのは、詩人は想像力の働きによって、近代資本主義農業が穀物増産の目的で耕作地化を進めていた沼沢地を神の世界、すなわち生態系が完全な形で残っている場所として見ていることをこの二行が暗示しているからである。

7連では、さらに、功利主義的な人間である農場主と沼沢地の関係が考察されている。Peterborough Fen は17世紀から排水工事が試みられたが、その一部であり、シギの生息地であった Whittlesey Mere という沼沢地は蒸気機関によって1850年によく排水され、耕作地となった。それゆえ、クレアは沼沢地の変化の過程¹⁹を知っていたと考えられる。耕作地の様子を、「川の風景と豊穡への期待の重みによって垂れ下がり、／それをじっと見つ

める農場主の顔に活気を与える若い穂が／波のように揺れているオート麦の畑と／小麦と豆がぎっしり豊かに育っている畑をのぞいて、ここにはほとんど何もない」と描写する。排水工事の改良によって沼沢地の一部は既に麦畑となっており、貪欲な農場主は利益を生む収穫を待ち望んでいる。この後、「人はときどき浅黒い草の、心地よい葉の広がりに出会う——／だが、たちまちその広がりには損なわれる。／なぜならば、鋤がそれをすぐに褐色の耕作地に変えるからである」という箇所における「浅黒い草の、心地よい葉の広がり」は、農地に変えられる以前の沼沢地に緑色濃く繁る雑草と出会う詩人の楽しみを表している。雑草の豊かさは、それが維持する生き物の多様性を意味するから楽しいのである。耕作地化は植物の豊かな生息地を消滅させ、多様な生き物を激減させることによって生態系を破壊するという認識が詩人には確かにある。沼沢地の耕作地化は、「農場主が売買するときの判断基準である利益というものにとって、／小さな緑の牧草地はほとんど魅力がない。／そしてわたしたちが沼沢地のことをどれほど考え、賛嘆しようとも、利益というものがこの風景を日々台無しにしているのだ。／牧草地の草は引き抜かれ、積み上げられ、／木々は刈り込まれ、ずんぐりした切り株にされている」と叙述される。沼沢地の風景にたいする詩人の賛美は、ピクチャレスクに影響された審美的観察というよりむしろ、その風景の中でそれぞれ独自の性質と価値をもつ個々の生き物が相互依存しており、その生息地が完全な状態で継承されているという生態学的観察に基づいている。外界の事物を反映する鏡に喩えられる詩人の精神以上のものとして、自然は重要であると詩人は考える。²⁰ だが、詩人は、樹木の伐採が冬の夜の家庭での安楽と喜びをもたらすという事実を、自然の収奪と生態系の破壊を行う人間中心主義への批判における妥協点にしている。それにもかかわらず、「このように、そうした家庭での喜びによって償われる利益を獲得するために／変化はこの風景から日ごとその魅力を欺き奪っている」(& so for gain that joys repay / Change cheats the landscape every day) という表現は、安楽や喜びと引き換えに、

沼沢地の地勢の変化が、重要な価値をもつ生態系を知らず知らずのうちに破壊していることを結局は批判している。"cheats" という語は、沼沢地の風景が象徴する「自然の権利」だけでなく、農業労働者が象徴する「貧民の権利」もまた農業主によって収奪されていることを暗示する。

7連では、エコロジストとしての詩人²¹ は次のように考える。様々な動植物を維持する沼沢地の豊かな土地は農場主たちが欲する穀物の生産を強制される。そのため、耕作地となった土地は、耕作地になる以前のように多様な生き物を維持することができなくなった。沼沢地の風景の消滅は生態系の破壊と生き物の減少を意味し、それはまた詩人にとって神の世界、エデンの園の消滅も意味する。8連における、冬風が蕭蕭として吹き抜けるギシギシやアザミが繁茂する、「そこ（沼沢地）では、人間を寄せつけない、荒涼とした自然のすべての事物にもかかわらず、彼ら（人間たち）は水鳥を殺し、食べる。／それは冷え切った体をさらにぞっとさせる光景である」（Where spite of all they eat & kill / A scene that makes the cold achill）という二行は、沼沢地に侵入し、その生き物を追放するかまたは殺す人間が、エデンの園を象徴する沼沢地を陰鬱な場所へと一転させることを意味する。'To the Snipe' の14連の「獲物を探す猟犬を連れ、／鉄砲をもって忍び寄るハンターが歩いていく」という詩行と、17連の「そこ（低湿地）では、殺し、滅ぼすことに／夢中になっている掠奪者たち」を想起させるこの二行には、「汝がよく姿を見せるこれらの場所で、／私は遍在する変らぬ神の愛を、落穂を拾うように感じとった」という詩行とともに、自らも楽園である沼沢地に侵入し、神に保護されてはいるが、攻撃を受けやすい生態系を破壊するアウトサイダーの一人として詩人が感じた自責の念も暗示されている。

注

1. Seamus Heaney, *The Redress of Poetry* (faber and faber, 1995), p. 79.
2. Mina Gorji, *John Clare and the Place of Poetry* (Liverpool U. P., 2008), p. 97.
3. Paul Chirico, *John Clare and the Imagination of the Reader* (Palgrave Macmillan, 2007), p. 165.
4. 'To the Snipe' と 'The Fens' のテキストは Eric Robinson, David Powell, and P. M. S. Dawson eds., *John Clare Poems of the Middle Period 1822-1837 Volume IV, V* (Oxford U. P., 1998, 2003) を使用した。
5. Margaret Grainger ed., *The Natural History Prose Writings of John Clare* (Oxford U. P., 1983), p. 334.
6. Mark Storey ed., *The Letters of John Clare* (Oxford U. P., 1985), p. 561.
7. Ibid., p. 561.
8. Ibid., pp. 591-2.
9. Ibid., p. 589.
10. Ibid., p. 594.
11. See W. John Coletta, 'Ecological Aesthetics and the Natural History Poetry of John Clare', *The John Clare Society Journal* Number 14 (1995), p. 41.
12. See Gorji, p. 113. このイメージには、クーパーの 'Retirement' という詩における "Far from the World, O Lord I flee, / From strife, and tumult far, / From scenes, where Satan wages still / His most successful war." という箇所のエコーがある。
13. See John Lucas, *England and Englishness* (The Hogarth Press, 1990), p. 153.
14. See Gorji, p. 119: "It (the snipe) is perfectly suited to its environment . . . This perfect fit between bird and place, this perfect at-homeness is what Clare desires . . ."
15. See Gorji, p. 123. 「別の存在の領域へと容易に入る」クレアは、シギの目に映る世界を見ることができる。クレアは、キーツの言う、理想的な詩的性格をもつ「カメレオン詩人」である。
16. Gorji, p. 14.
17. Jonathan Bate, *The Song of the Earth* (Picador, 2000), p. 174: "But what the life and work of John Clare can show us is that even in terms of pragmatic self-interest it is to our benefit to care for nature's rights—our inner ecology cannot be sustained without the health of ecosystems." James McKusick, *Green Writing: Romanticism and Ecology* (Macmillan, 2000), p. 78: "Taken together, his [Clare's] works convey a detailed knowledge of the local flora and fauna, an acute awareness of the interrelatedness of all life forms, and a sense of outrage at the destruction of the natural environment."
18. Bridget Keegan, *British Labouring-Class Nature Poetry, 1730-1837* (Palgrave Macmillan, 2008), pp. 165-6: "The snake does not lead the poet towards any

Biblically inspired comment on nature's fallenness. Instead, the snake simply falls into the water and glides away. This ecosystem remains a paradise where snake and human coexist without animosity." 'The Fens'における蛇の描写に関するキーガンの解釈は示唆的である。

19. See Keegan, pp. 150-2, 156-7, 162. 「闇、病、恐れ、不気味、憂鬱、おぞましさの場所」、つまりピクチャレスクでも崇高でもない、「不健康で」「陰鬱な」場所である湿地を排水する主要な衝動は経済的なものである。肉体的、精神的、社会的害悪を取り除き、病気を治し、豊穡をもたらすことは、湿地の周辺に住む、墮落した人間の救済のために「新しいエデン」を創造することであり、そのための排水は「エデンの園を回復する直接的手段」(a direct route to regain Eden) であると考えられていた。文学的伝統から見れば、ダンテが煉獄の一部を "swamps land" として表現したように、ミルトン、バニヤン、ダイヤーは湿地をサタン(悪魔)と結びつけたが、クレアは、まったく逆に、自由を象徴する沼沢地そのものをエデンとして愛した。
20. See Keegan, p. 149.
21. See Keegan, p. 149. エコロジストとしてのクレアの詩の特質に関する、キーガンの次の評価は傾聴に値する。"Clare's achievements as a green thinker reach beyond even those of his Romantic peers such as Wordsworth. Yet one thing that recent critical work on Clare has neglected to highlight is that Clare is the first English poet to celebrate systematically the almost universally despised wetland ecosystem. In writing lovingly about fens, swamps and moors, Clare writes virtually without literary precedent. In contrast to earlier poets, both polite and plebeian, who praised the *disappearance* of wetlands, Clare works to conserve this environment in his poetry primarily by emphasizing its resistance to the conventions of visual consumption."